



坂口尚『あっかんべー休』講談社KCデラックス1巻カバー(1993年)、同2巻カバー(1994年)、同3巻カバー(1995年)、同4巻カバー(1996年)〈後期展示〉

フォーラム

さ か ぐ ち ひ さ し

坂口尚 禅と

からみる

日本マンガ文化

「坂口尚と一休」展関連イベント

12月6日(土) 15:00~18:00

会場 明治大学 駿河台キャンパス

料金 1,100円

※会場はホームページにてお知らせします。



▲お申込みはこちら

坂口尚(1946~1995)は、手塚治虫の虫プロダクションから独立後、1980年代以降に長編三部作となるマンガ『石の花』『VERSION』『あっかんべー休』を刊行するなど、その現代性の高い作風は多くの漫画家に影響を与えています。その坂口が最も注目した禅僧・一休宗純(1394~1481)は、破戒やエロスを繰り返すなど、その「風狂」「風顛」の精神が今なお語り草となっています。戦争と平和、自我の所在、人間性の探究、環境とテクノロジーなどを問い続けた坂口が、『あっかんべー休』で一休や禅をどのように捉えて描き出したのか、スペシャリストたちとともに読み解きます。



飯島 孝良

Didier DAVIN

浦沢 直樹

横山 ひろあき

鈴木 賢三

宮本 大人

花園大学国際禅学研究所
副所長

国文学研究資料館
教授

漫画家

坂口尚作品保存会
午後の風スタッフ

日仏翻訳家、
出版ライセンスコーディネーター

明治大学
国際日本学部教授

明治大学リバティアカデミー

【平日 10:30-19:00 / 土曜 10:30-15:30(日・祝休業)】

☎ 03-3296-4423

✉ academy@mics.meiji.ac.jp

坂口尚という作家は、常に先鋭的な表現に挑戦し続けたアウトサイダーであり、孤高の存在であり続けました。坂口作品を際立たせているのは、卓越した絵の魅力もさることながら、物語の根底にある哲学性、その「まなざしの深さ」ではないでしょうか。『石の花』では「理想と現実」の境界を思索し続け、『VERSION』では「自我と生命」の問題を問い、『あっかんべー休』では二元的な思考を超克する方法論として、一休の生き方と“禅”に何かを見出したのだと思います。今あらためて坂口作品を読み解くことは、私たちが生きているこの世界を「どう生きるか？」を考えることだと思います。坂口尚のことも一休宗純のこともよく知らないという方にも、ぜひフォーラムに参加していただいて、意見交わすことができたなら願っています。

横山ひろあき（坂口尚作品保存会午後の風スタッフ）



坂口尚『あっかんべー休』第26話「骸骨」(1995年)〈後期展示〉

《内容(予定)》

1. 講演「禅文化史からみた『あっかんべー休』：語られ続ける一休像の系譜とその特徴」

飯島孝良（花園大学国際禅学研究所副所長）

2. 講演「禅思想史からみた『あっかんべー休』：作中に取りあげられた公案にある禅を読み解く」

ディディエ・ダヴァン（国文学研究資料館教授）

3. 対談「坂口尚という「衝撃」：その出逢いと普遍性」

浦沢直樹（マンガ家）×宮本大人（明治大学国際日本学部教授）

4. テーブルトーク「坂口尚と一休を通して現代世界をみつめ直す」

飯島孝良、ディディエ・ダヴァン

横山ひろあき（坂口尚作品保存会午後の風スタッフ）

鈴木賢三（日仏翻訳家・出版ライセンスコーディネーター）

司会進行：宮本大人（明治大学国際日本学部教授）

坂口尚『あっかんべー休』第11話「暗雲」(その三) (1994年)〈前期展示〉



一休宗純は、室町時代から近現代にいたるまで、虚と実が入り交じりながらさまざまなメディアで語られ続けてきました。それだけ一休の注目度が高かったとはいえ、実際には何を考えどう表現していたひとなのか——たとえば、禅宗には頂相というものがあります。僧の面目が描かれたところにその境地を表す賛文が付されたもので、描かれた僧の顔の横に「フキダシ」のように付された賛を読み解くことで、われわれは多くを知ることができます。この一休が生きた中世日本、この時代に広まりをみせた禅、そして坂口がマンガを通して描こうとしたものとはどのようなものか、禅や一休にはじめて触れる方にも味わって頂き、いまを生きる我々の考えるヒントを見いだせればと考えています。

飯島孝良（花園大学国際禅学研究所副所長）

リバティアカデミーのSNSはコチラ→
最新の講座情報を発信

